

解する。第二回では各研究の問題点、不足点などのついでに討議を行う。第三回では、第二回の討議の結果をふまえて、それぞれの研究の修正をおこない、第三回でそれを発表する。最後に第四回で最終的な調整を行う。

調整班研究B03「近現代社会と古典」

調整班代表 中川 久定

研究目的

5人の計画研究代表による特色ある研究を、互いに関連させ、全体として古典テキストがヨ・ロッパやアジアの近現代社会においてどのように読まれ、それぞれの社会でどのような役割を果たしてきたかを明らかにすることが、本調整班研究の目的である。

具体的には次の二点に集点を絞った共同研究を行う。

1. 社会における古典の教育・伝承システムのあり方の研究
2. 古典の読み方の新展開の解明

研究計画・方法

1) 研究分担者各自が相互の研究内容に対する理解を深めることができるように、分科会形式の研究会を2回、全体の研究会を1回少なくとも開催する。これによって本調整班の研究目的や計画を確認し、次年度以後、共同研究が円滑に行われるようにさらに課題の絞り込みを行なう。

2) 本調整研究に属している研究分担者の専門は、西洋学とイスラム学に限られているので、同様の研究を行っている他分野の研究者を複数招き、相互に意見を交換する場を設定する。

専門研究

A01 『明月記』『吾妻鏡』の写本研究と古典学の方法

研究代表者 五味 文彦
東京大学人文社会系研究科 教授

研究分担者 安田 次郎
お茶の水女子大学文教育学部 教授
近藤 成一
東京大学史料編纂所 助教授

今村 みよ子
東京工芸大学女子短期大学部 助教授

田淵 句美子
国文学研究資料館 助教授

桜井 陽子
熊本大学教育学部 助教授

本郷 和人
東京大学史料編纂所 助手

尾上 陽介
東京大学史料編纂所 助手

高橋 慎一郎
東京大学史料編纂所 助手

菊池 大樹
東京大学史料編纂所 助手

井上 聡
東京大学史料編纂所 助手

高橋 典幸
東京大学史料編纂所 助手

小川 剛生
熊本大学文学部 講師

研究目的

日本の古典学の再構築という視点から、中世で重要な位置を占めている『明月記』と、『吾妻鏡』の写本研究を行うものである。この二つの古典を選んだのは、中世に古代の古典を研究して王朝文化の再興とその咀嚼を試みようとした代表的人物が『明月記』を著した藤原定家であったこと、その『明月記』などを原史料として編纂されたのが『吾妻鏡』であり、江戸時代になって広く読まれ、研究されるようになったことなどによる。本研究ではまず写本研究を行うことで、中世の古典学がいかに築かれたのかを改めて問い、また近世の段階で写本がいかに形成されたのかを考え、さらにその現代語訳などの方法についても考察を進めてゆくことで、今日の段階における古典学の方法と意義を問い直したい。『明月記』は最近になって冷泉時雨亭叢書として影印本が刊行されることとなり、その原本と写本との関係がようやく明らかにされつつあることから、底本をつくり、写本をも広く収集して、原本と写本との関係を徹底的に探ってゆく。従来の『明月記』の研究は、本研究代表者の五味の主催する明月記研究会が精力的に写本研究や注釈、現代語訳を進めてきており、雑誌『明月記研究』には関係の研究論文を多数載せてきており、その成果の上に立って研究を行いたい。『吾妻鏡』は編纂物である性質上、編纂上の誤りが多く見えることから、その記事がいかに形成されていったのかという視点に立って、写本を広く集め、本文研究を進めてゆく。これまでの鎌倉幕府の政治史の理解のための研究の成果を吸収しつつ、古典学の方法を考える側面から研究を行ってゆく。本研究代表者の五味の『吾妻鏡の方法』が先鞭をつけており、その延長上で

研究を進めることになろう。

研究計画・方法

『明月記』班と『吾妻鏡』班の研究組織をつくり、それぞれに研究会を開いて書物の在り方に相応しい研究方法を考え、課題を設定し、そのうえで情報を交換しながら、相互の関心に焦点をあてて研究を進めてゆく。『明月記』班は、全体の研究会を毎月一回実施して、『明月記』の注釈と現代語訳の方法を吟味する作業を行う。さらに(1)原本に基づくテキストの作成、(2)写本諸本の収集、(3)藤原定家の著作の調査と収集、についてそれぞれに研究分担者に割り当てて作業を行い、定期的に報告会を開き、情報として蓄積してゆく。『吾妻鏡』班は、研究会を隔月一回実施して、研究分担者と研究協力者に將軍のそれぞれの年代記の特質を把握する課題を設定するとともに、記事の誤謬を改めてゆく作業を行う。さらに、(1)校訂本に基づくテキストの作成、(2)写本諸本の収集について、分担者が個々に行い、定期的に報告会を開き、情報として蓄積してゆく。また年に二回、二つの班の合同の研究会をもち、相互の方法的吟味と成果の発表の場としてゆく。以上のためにはパーソナル・コンピューターの有効利用が不可欠となる。テキストのデータ・ベースの構築にとどまらず、テキストから和風漢文の読み下しや現代語訳が可能になるようなソフトの構築を模索する。そのためには研究補助者や専門的知識の提供が必要とされる。また写本は各地に散在しているので、各地の研究機関の調査や研究会開催のための会費や旅費が必要となる。

A01 原本『老子』の形成と林希逸『三子虜齋口義』

研究代表者 池田 知久
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究分担者 関口 順
埼玉大学教養学部 教授

研究目的

- (1) 原本『老子』の形成と林希逸『三子虜齋口義』の研究であり、紙と印刷術の発明以前と以後における中国古典の原典の形成と注釈の流伝を解明する。
- (2) 新出資料に基づき厳密な文献学的研究と思想史的研究を行う新しいタイプの古典学であり、その際東アジア三国の古典文化の異同を視野に入れている点にも特色と意義がある。
- (3) 2つの対象について中国・韓国・欧米・日本の研究者と絶えず意見交換を行いながら進める研究であり、

日本においては勿論世界においても最新・最先端に位置している。

(4) 本研究課題に密接に関連した課題で代表者及び分担者が従来受けた研究費はないが、『郭店楚墓竹簡』についての「ビブリオグラフィー」「荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』筆記、老子」等を作成、米国、ダートマス大学で開かれた国際シンポジウムに参加・口頭発表、論文「日本における林希逸『莊子虜齋口義』の受容」等を刊行、中国・韓国・日本の林希逸専門家と意見交換を深める等の研究経過がある。

研究計画・方法

1. 平均2月に1回研究会議を開き代表者が郭店『老子』・馬王堆『老子』(4回)と分担者が『老子口義』を(2回)報告。全国より研究協力者を招き専門的知識を提供してもらう(約5名)。会議の成果はレポートにまとめて印刷しニューズレター等に掲載。
2. 高性能ノート型パソコン1台を購入しこれを用いて新出資料・『老子』を始めとする郭店楚簡のデータベースを作る。入力には学生アルバイトを延べ約400時間使う。
3. 『三子口義』の版本を調査するため約5日間の国内調査旅行を延べ2回行い、マイクロフィルム化・デジタル撮影等を進める。
4. 夏期または冬期休暇を利用して約1週間の中国調査・研究旅行を延べ3回行う。目的地は湖北省荊門市、上海博物館、湖南省長沙市、杭州大学古籍研究所である。

A01 チベット大蔵経とチベット蔵外文献研究

研究代表者 御牧 克己
京都大学文学研究科 教授

研究目的

本計画研究は、チベット学に於ける古典学の再構築を目指し、以下の二点より研究を遂行する。

1. 従来明らかになっている主要文献の整理 (即ち、目録、解題、批判的校訂本、翻訳、データベースの作成)。チベット大蔵経とチベット蔵外文献について夫々に行う必要があるが、特に、研究代表者御牧の具体的な分野研究としては、宗義文献の体系的な整理と、ボン教教義文献の解明(仏教教義文献との比較にも留意しつつ)に主眼を置く。
2. 未入文献の入手 チベット大蔵経の写本、チベット蔵祖と文献、ボン経大蔵経について我が国に将来されていないチベット文献の入手に努める。

研究計画・方法

研究目的欄に掲げた項目に沿って平成11年度は以下の研究を遂行する。

1. 従来明らかになっている主要文献の整理 特に、研究代表者御牧の分野研究として初期宗義文献を集中的に整理する。また、ボン教教義文献『ボン門明示』の批判的校訂本と翻訳を作成しつつ、その中に引用されている諸文献を同定し、夫々の文献について解題を試みる。
2. 未入手文献の入手 チベット大蔵経の版本、写本の内先ずマイクロフィッシュの形で出版されているプダク (Phu drag) カンギルを購入する。ボン教大蔵経のカンギルを入手する。後者は予算的に平成12年度の購入とする可能性が高い。その他の従来未入手のチベット蔵外文献を予算の許す限り購入する。

A01 タミル古典の文献・写本・電子ファイルに関する情報および現物の収集

研究代表者 高橋 孝信
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

研究目的

- (1) タミル古典学の現状：タミル文学はサンスクリット文学とともにインドを代表する文学であるが、わが国ではこれまでほとんどかえりみられず、その結果わが国にはタミル原典さえほとんどない。
- (2) 本研究の目的：1) タミル古典テキストは今日では絶版であり入手は不可能であるが、大英図書館や米議会図書館などに所蔵されている。それらの所蔵状況の調査と、コピーやマイクロフィルムの収集。2) インドや欧米の研究機関などが作成している古典の電子テキストの実態調査およびその購入。国内ではアルバイトを使って、未入力テキストの入力、および諸外国で入力済みテキストの修正。3) インドや欧州諸国における図書館所蔵の写本の実態調査、およびそれらの実物、写真、マイクロフィルム等の収集。
- (3) 本研究の意義：a) わが国のタミル学にとって、原典コピーなどの入手によりはかり知れない利益を蒙ることができる。また世界の学会でも、写本の所在についての報告の意義は大きい。b) 他の古典諸学との関連 タミル古典学は歴史・文化の流れに翻弄され、様々な問題に直面してきているから、これらを報告することにより他領域の古典諸学の現状認識および方法論に新たな視点を与えることができる。

研究計画・方法

本研究の目的 インドおよび欧米におけるタミル古典の刊本、写本、電子テキストに関する情報の収集とそれらの入手、また国内でのそれら情報・資料の整理および電子テキスト作成 達成のための平成11年度計画は以下の通りである。

- a. 情報処理および電子テキスト利用のための備品 (デスクトップパソコン一式、プリンターなど) 購入。
- b. 外国調査I (インドへ3週間): タミル大学の電子テキスト入力状況の調査と入力済み電子テキスト (最古層文献) の購入交渉 (1週間)。U.V. スヴァーミナタアイヤル図書館 (マドラス) 所蔵の写本の実体調査、およびそれらの実物、マイクロフィルム等の収集 (2週間)。
- 外国調査II (英国へ3週間): 大英図書館所蔵の関連文献の調査と、コピーおよびマイクロフィルムの収集 (他のドラヴィダ諸語文学についても文献調査のみ行う)。
- また英国主要大学での写本所蔵状況の調査。
- c. アルバイトを使って、文献コピー等の整理および電子テキストの作成および修正。

A01 チャガタイ・トルコ語、ペルシア語文献の諸写体研究

研究代表者 間野 英二
京都大学大学院文学研究科 教授
研究分担者 真下 裕之
京都大学人文科学研究所 助手

研究目的

世界の各国に写本の形で保存されているチャガタイ・トルコ語およびペルシア語の古典を精査し、それらをコンピュータを用いて整理・分析することによって、イスラーム世界に於ける古典像の再構築を目指す。

【特色と予想される成果】 研究代表者の近年の写本研究の方法の継承・発展を計るものであり、写本のマイクロフィルムによる収集、コンピュータを利用したKWIC索引の作成、校訂本の作成、訳注の刊行などが予想される。

【研究の位置づけ】 国際学界でも研究が不十分な分野で、本研究はこの分野の最先端をゆくものである。

【従来の研究経過・研究成果】 平成6年度～平成8年度の科学研究費 (基盤研究 (A) 1) 計700万円を利用して、研究代表者の当時の研究グループは、「トルコ・イスラーム時代中央アジア文化の総合的研究」を行い、その成果として、写本のマイクロフィルムを収集したほか、チャガタイ・トルコ語の古典『パーブル・ナーマ』のアラビア文字による校訂本、コンコードダンス、日本語によ

る訳注を公刊した。また先の研究成果報告書には、ペルシア語の古典『ターリーヒ・ラシーディー』の一部の校訂テキストと訳注とペルシア語による歴史作品『シャイバーニー・ナーマ』の校訂テキストを収録した。

【他省庁の研究事業との関係】 ない。

研究計画・方法

【役割分担】 間野は 総括および 主としてチャガタイ・トルコ語写本を担当し、真下は主としてペルシア語写本を担当する。

【計画・方法】 1. 現有の資料を補完するため、写本調査を目的とした外国（ロシア、イギリス）及び国内の調査旅行を行う（旅費）。2. 調査した写本の内、重要な写本についてはマイクロフィルムによる収集を行う（消耗品費）。3. 蒐集したマイクロフィルムの内、特に重要なものの焼き付けを行う（その他）。4. 現存のコンピュータを活用するほか、本研究専用コンピュータ1台を購入し（設備品費）、アラビア文字を扱える専門家に写本のテキストデータの入力を行わせる（謝金）。また、アラビア文字の写本研究のためにコンピュータを利用する新たな方法を、専門知識を持つ研究者の助力を得て開発する（謝金）。5. 原典の校訂本など中央アジア史・イスラーム史関係図書の収集を行う（消耗品費）。

A02 六朝期の著作における伝統の継承と変容

研究代表者 興膳 宏
京都大学大学院文学研究科 教授

研究目的

六朝期の学術文化は、古代以来の典籍の系統づけの成立、自覚的な文学創作意識の誕生、文学・書画理論の展開と異分野間の相互交渉という顕著な現象を有する点で、中国古典文化の流れにおいて、きわめて重要な位置を占める。本研究は、これらの諸現象相互を連関・統合させながら研究を加えることで、六朝学術文化の全体像を提示しようとするものである。

具体的には、1) 梁元帝『金楼子』の研究、2) 文学批評用語の研究、3) 六朝伝記資料の研究の三つの柱を立てて、所期の目的を達する計画である。

研究計画・方法

1) 『金楼子』は、本文校訂を行なう。国内資料では校勘に不足する事態も考えられるので、必要に応じ、中国の所蔵機関で調査を行なう。

2) 文学批評用語の研究は、データベースを作成する。

適宜研究補助を雇い、作業の効率化を図る。

3) 伝記資料の研究は、六朝典籍の著者として重要な人物をピックアップし、資料の整理と訳注の作成に着手する。研究協力者の協力を全面的に仰ぎ、謝金・旅費などは多めに配分する。

全体の作業を通じて、コンピュータによるデータ処理を積極的に活用する。

A02 インド哲学における聖典観の展開

本文批評の方法論的反省を踏まえて

研究代表者 丸井 浩
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

研究分担者 金沢 篤
駒沢大学仏教学部 助教授

研究目的

(1) インド哲学における聖典観の展開を、厳密な文献研究を通して解明することによって、インド思想における哲学と宗教の融和・交錯関係の側面を浮かび上がらせることが目的である。

(2) これまで古典研究の各分野で個別的に蓄積された研究手法を、分野横断的に再検討することによって、より客観的な本文批評の方法論構築を指向した文献研究である。この点に本研究の独自性がある。

(3) 平成9年度基盤研究(B)「古典研究の再構築」開始以後、諸分野の古典研究者が参集し討議を重ねて、再構築の基本構想、基本方針、組織体制が構築され、ニューズレター第1号(1998年10月)として発行された。そこに示された全体構想を踏まえてインド哲学研究の伝統を捉えなおし、より広い視野からインド古典研究の方法論と意義を模索するという方向性を持った計画研究である。

(4) 研究代表者は、平成9-10年度科学研究費補助金基盤研究(CⅡ)「インド論理学派思想史解明」(課題番号 09610019)を推進中であるが、これは本計画研究の重要な基礎を成すことになる。

研究計画・方法

(1) 古典インド哲学体系の完成期に相当する10世紀前後に活躍した哲学者(ジャヤンタとヴァーチャスパティ・ミシュラが中心)の作品を精密に解釈・分析した上で、正統インド哲学諸派におけるヴェーダ聖典観の展開を、文献実証的に明らかにする計画である。

(2) そのうちで平成11年度は、設備品設置等による研究環境の整備と、写本調査、資料・情報収集を推進し、そのための海外旅費(インド、ヨーロッパ)も計上し